

メジャーリーグから人種・民族構成をみる

広告代理店勤務 野球評論家 篠原 一郎

1. 日本高校野球の多国籍化

日本のスポーツ界も人種・民族をめぐる様相は変化している。今年夏の甲子園を初めて制した早稲田実業は、大先輩である王貞治監督（ソフトバンクホークス）が2年のとき春のセンバツで優勝し、国体にも出場した。しかしその国体には、当時の規定によりエースの王投手だけが出場することはできなかった。彼が中国籍だったからである。半世紀前のことである。

30年ほど前までは、甲子園にカタカナの名前の選手が出たら大きな話題になっていたが、最近は東洋大姫路高校アン投手や、東北高校ダルビッシュ投手、関西高校ダース投手らの活躍も記憶に新しく、珍しくなくなっている。

2. アメリカ合衆国スポーツ界の人種・民族問題

アメリカのスポーツ界はどうか。1974年にハンク＝アーロンがベーブ＝ルースの本塁打記録に迫ったときに受けた嫌がらせは、明らかに人種・民族差別の要素が入っていた。今そのアーロンの記録を追うバリー＝ボンズが直面している「それほど歓迎されてないムード」は、「彼がもし白人だったら同じようなムードで迎えられていたか」と思わずにはいられない。

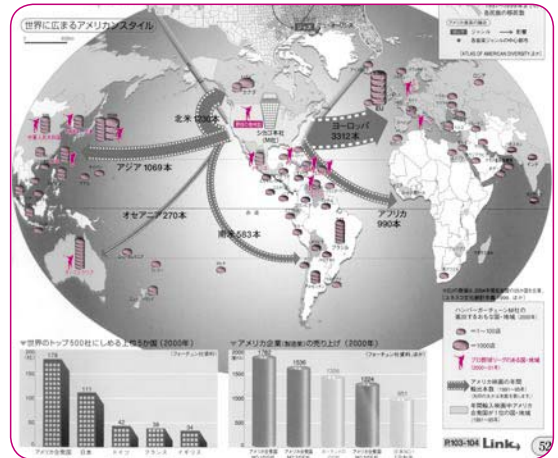
アメリカにプロ野球チームが発足してから140年近くになるが、この間人種・民族に関する門戸は確実に広がってきた。

最初の80年近く、大リーグは黒人を完全に締め出してきたのだ。当初は黒人が運動能力で劣るとい根拠もあったと聞かすが、オリンピックなどで黒人選手が表彰台に上がるのを見ても、身体能力で彼らが劣っているということはない。

長距離走ではアフリカ勢が、短距離走ではアメリカ勢が強いけれど、いずれにしても黒人以外が表彰台に立つほうが少ないのではないかと思うほどだ。そして走力は、野球に限らずスポーツではとても大切なはずである。

アメリカの社会と文化を知るうえで野球がいちばんと主張する気はないが、図1のように、世界に君臨す

るアメリカの有名企業からみるのとは別の観点でアメリカが全世界にもたらした影響力を探るのはおもしろいものだ。コカ・コーラやマスター・カードのように世界中の消費者から受け入れられた商品やサービスもあるし、野球のように日本のほか一部の国以外では全く普及することがない「輸出品」もある。野球は日本で最も人気のあるスポーツになったけれども、野球が国民的な人気を得た国はほかには韓国、キューバ、ドミニカ、台湾程度である。ヨーロッパでは、地図からもわかるようにオランダとイタリアでしかプロリーグはなく、アフリカや南アメリカでは全く普及していない。世界中でコカ・コーラが飲まれていることや世界中でサッカーのプロリーグがあることを考えると不思議なことである。



(図1)帝国書院「標準高等地図(新訂版)」p.52

一方、ヨーロッパ系の移民が数多くいるアメリカではその風土のせいなのか大リーグで活躍する選手は多い。野球に興味があればほとんどい人でもルー＝ゲーリッグやジョー＝ディマジオの名前を聞いたことがあるのではないだろうか。姓で想像がつくとおり、それぞれドイツとイタリアからの移民を親に持つふたりは、アメリカでもベーブ＝ルースと並ぶ、野球の枠を超えた国民的英雄である。当初、大リーグでは上述したようなヨーロッパ系移民がいる以外は他の国籍の選手も人種も採用されてこなかった。暗黙のうちに事実上禁止

されていたのである。しかし、アメリカ国民に広く普及した野球は黒人のファンも多く、まもなくニグロリーグ(注)は隆盛を極めた。残念ながら大リーグの記録でも認定されていないし、映像も残っていないが、大リーグでプレーするチャンスがあればトップクラスにはいる選手が多くいたであろうことは間違いない。

3. 野球ビジネスと人種・民族・国籍

1947年について大リーグ史上初の黒人選手ジャッキー＝ロビンソンがドジャースでデビューしたことは、アメリカ社会史上にも特筆されている。白人のファン、相手選手、そしてときには自軍の選手からの迫害に耐え抜いた彼がいなければ、後に続く黒人大リーガーはいなかったかさらに数十年遅れたかもしれない。

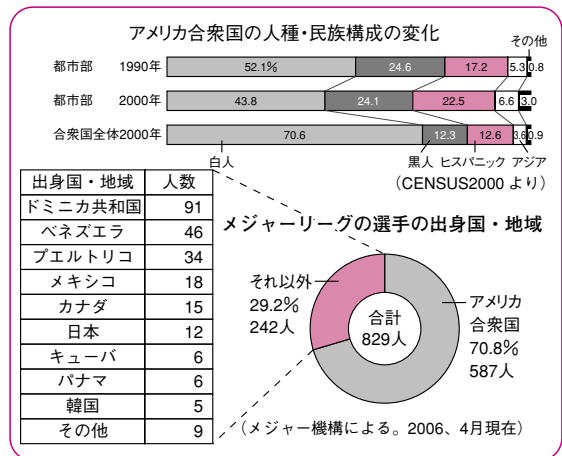
1997年、ロビンソンの大リーグデビュー50周年を記念して、彼の背番号42は全球団で永久欠番となった(現役選手ですでに42をつけている場合を除く)ことと、彼以降の多くの黒人選手がジャッキーのおかげで自分があるというコメントをさまざまな機会で発していることで、いかに彼のデビューが大きなきごとだったかがわかると思う。

その後黒人の大リーガーがふえるとともにニグロリーグは消滅したことも触れておきたい。

周囲の反対を押し切ってロビンソンの大リーグデビューを推進したドジャースの会長兼共同オーナー兼ゼネラルマネジャーは、1980年代以降、ビジネスの観点を選手獲得の要素にしていたのは明らかであった。つまり、ドジャースがロサンゼルスに移転して20年以上が経ち、このエリアにメキシコ人、韓国人、そして日本人の人口がふえた。これに着目したドジャースはバレンスエラやバルデス、パク、そして野茂を積極的に登用するようになった。彼らが登板する日は観客もふえ、グッズも飛ぶように売れ、放送権収入もあり、ドジャースに大きな利益をもたらした。

4. 人種・民族構成の推移

こうして、1947年にたったひとりで始まった黒人の比率は74年のピーク時には26%まで行ったが、98年には14%に下がっている。一方、ラテンアメリカからの選手は1950年にはわずか4%だったが2000年に20%を超え、大リーグの選手で最も多い姓はスミスやウィリアムスではなくマルチネスであるという時代になった



(図2) アメリカ合衆国とメジャーリーグにおける人種・民族構成ほどである。

もうひとつ、大リーグ史と都市経済学との関係で欠かすことのできないできごとは、1950年代後半にドジャースとジャイアンツが、それぞれブルックリンとニューヨークから相次いで西海岸に移転したことである。100年近く東部の大都市でのみ行われた大リーグは、この2球団の移転とその後の球団拡張で1901年に16だった球団数は、21世紀には30球団を迎えるほどになった。

日本もアメリカもプロ野球は大都市でないに興行が成立しないものだが、ファンに受け入れられる選手の構成は必要である。パ・リーグの不人気球団だった福岡ダイエーホークス(当時)がリーガーの人気球団になった要素は冒頭に登場した王監督就任もあるが、秋山、城島、松中など地元九州出身の選手を次々獲得して、観客動員向上に努めた地道な努力も忘れられない。

1960年代の公民権運動など黒人をめぐる人種・民族差別問題に悩まされたアメリカは、大リーグでの人種・民族構成を鏡に映すように、黒人の比率が減ると入れ替わってふえてきたラテンアメリカからの移民問題が起きるようになっていく。図2から、アメリカ社会も都市部でヒスパニックの人口構成比は明らかに上がっており、大リーガーの人種・民族もそれと相乗作用で変化しているのがわかる。ホークスの手法は、大リーグのビジネス戦略を学んだものかもしれない。

今後もビジネスつまり経済と社会とスポーツが複雑に絡み合っただけでアメリカは変化をしていくはずで、それを見逃すことができない。

(注) ニグロリーグ：19世紀の終わりから1950年代まで存在した黒人だけのプロ野球リーグ